

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653117

研究課題名（和文） 「中1ギャップを探る」－不登校の年齢的变化に影響する要因の検討－

研究課題名（英文） Study of gap of junior high school and elementary school on factors affecting the age changes in the non-attendance school children.

研究代表者

川島 一夫 (KAWASHIMA KAZUO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：40135116

研究成果の概要（和文）：

本研究は、中1ギャップについて1.小・中学校間での教育方針の違い、2.中学校で教科担任制への適応、3.小・中連携が密でないことを問題として検討をかさねてきた。その結果の検討から以下の仮説に至った。1.不登校を個人の問題として考える立場と不登校を社会の問題として考える立場の違いについて、2.不登校になった場合の経済的損失を考えること、3.不登校児の環境に自己意識の発達についてのモデルがないこと。

研究成果の概要（英文）：

This study was to investigate the following about Tyuiti gap. 1. Differences in education policy between at the elementary and junior high schools. 2. Adaptation to the subject teacher in the system of junior high school. 3. That cooperation of junior high school and elementary school is not dense. From examination of the results, the following points became a problem. 1. Non-attendance school children to be considered a social problems or personal problems. 2. That there is a need to consider the economic loss if you be non-attendance school children. 3. That there is no model for the development of self-consciousness to the environment of non-attendance school children.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	330,000	2,030,000

研究分野：発達心理学、生徒指導

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：不登校、中1ギャップ、自己意識

### 1. 研究開始当初の背景

研究当初においては、中1ギャップの原因として、1.小学校と中学校の教育方針が異なるために子どもの価値観に迷いがでるのではないか、2.中学校では教科ごとに教員が違う教科担任制に変わり教師とのつながりが弱くなるからであろう、3.小学校時代の子

もの状況が中学校に伝わっていないために生ずる可能性と、小学校に比べて学習内容が難しくなり学習につまずく生徒が増えてくるであろうことを検討してきた。

### 2. 研究の目的

以下のことを検討することが目的であつ

た。1.中1ギャップの原因として、年齢による発達を背景に小学校と中学校の教育方針が異なるために子どもの価値観に迷いがでるのではないか、2.中学校では教科ごとに教員が違う教科担任制に変わり教師とのつながりが弱くなるからであろう、3.小学校時代の子どもが中学校に伝わっていないために生ずる可能性と、小学校に比べて学習内容が難しくなり学習につまずく生徒が増えてくるであろうということ。

### 3. 研究の方法

東京都及び長野県内の小学校の最終学年である小学校6年生(152名)と中学1年生(164名)に、アンケート形式の質問紙を行った。質問紙は家族機能認知尺度(杉浦,1998)、期待・不安尺度(小泉,1995)、階層型学校適応感尺度(三島,2006)を再構成し作成した。

質問項目は、資料に見られるように、小学生版と中学生版を漢字の使用度と中1ギャップを想定した過去形の文章を使用する点で、別々に作成された。回答は、①とてもそう思う、②すこしそう思う、③あまりそう思わない、④まったくそう思わない、の4段階評定であった。

### 4. 研究成果

【検討項目1】小学生時代の適応感と中学生の適応感の関連について

中1ギャップに関連して、小学校についての適応感が高い場合、中学校についての適応感も高いことが明らかとなった。小学校についての適応感が高いということについては以下の点が考えられる。1つは、小学校についての適応感が高い子どもは、学校に対する適応の仕方を知っているということである。そのような子どもは意識せずに小学校の頃に身に付けた適応方法を用い、同様に中学校についても適応できていると考えられる。多くの児童が、小学校段階での友人関係、いわゆるギャングエイジから、チャムグループの形成のための友人関係への進む過程で、学校に対する期待と友だち関係や授業を楽しむという部分で、小学校と同様に対人関係の構築を行うことが見られた。これは、例えば、

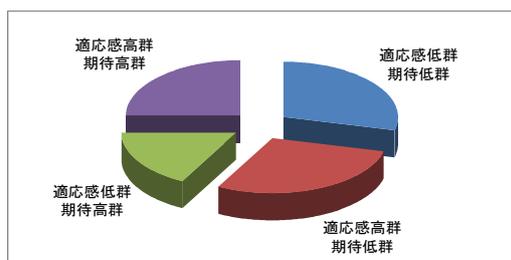


図1 小学校での中学校への期待と中学校での適応感

クラスでの友人関係における適応が、他の場面での(部活動など)におけるストレスへの対応に般化することで、小学校での適応感が高かった子どもはより、中学校での適応度も高くなると考えられた。これは図1にみられるように小学校での中学校への期待感と中学校での適応についても同様であった。他の一つは学校に対する動機づけが高く学校への肯定的な感情を持っている児童について、小学校での高い適応感、そのまま中学校での学校や授業に対する高い関心と興味を持つことで高い自己意識を持続することが出来るということである。その結果、中学校生活に対して積極的になり、学校における楽しいことや自分の居場所を見つけることで高い自己意識の保持が可能になり中学校での適応感も高まることが見られた。

【検討項目2】中学校生活に対する予期不安と中学校での学校適応感の関係について

中学校生活に対する期待や不安が低くても高くても、中学校についての適応感は変わらない結果が見られた(図2参照)。中学校に入学し、実際に中学校生活を送って見なければわからないこともある一方で、入学するまでは不安だったことも入学してみたら意外とうまく対応できることもある。また、期待していた内容であっても、初期の緊張は、次第に慣れてくることも考えられる。小学校での中学入学に対する不安感は時間の経過とともに安定してくることが考えられる。それは調査時期が学校によって異なることと、主な時期が10月頃であったことは、期待と

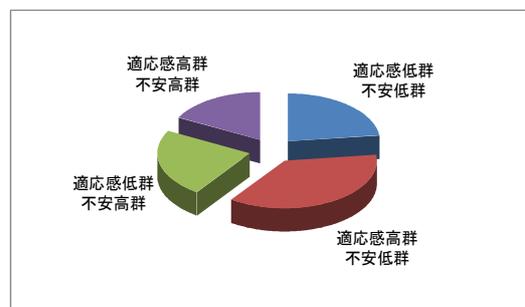


図2 小学生の中学生生活への不安と中学校の適応感

不安の解消が行われつつある時期であったとも考えられる。

【検討項目3】小学校での学校適応感と中学校における学校適応感の関係について

小学校での適応感の高さは、中学校入学後の適応感と高い相関を持つことが明らかとなった。小学校の適応感が高いことについて、以下の2つが考えられる。まず、小学校での適応感の高さは適応の仕方を学習していることがあげられる。その結果、中学校でも、

同様の適応の方法を使うことで高い適応を見せているということである。次に、学校への興味が肯定的なものである場合、小学校での学校への一般的な適応度が高く、中学生生活での学校に対する興味や関心も高くなることが考えられた。

**【検討項目4】中学生の家族機能への適応度と中学校での学校適応感の関係について**

中学校入学後の家族機能の認知が良好である場合、中学校で適応感が高いという結果となった。これについては、中学生への入学後には、環境の変化によるストレスに対応するためには学校での友人関係だけでなく家族との関係が良好であることが必要であるということができる。家庭内での関係が良好であり家族間での会話が多いなど、特に母親との関係がうまくいっている場合、学校でのストレスや問題を家族に話し、相談することが可能となっているであろうと予想されるためである。一方、小学校での学校適応感得点と家族機能認知得点の間の相関が認められなかった。これは、小学校では、最終学年であり、反対に対象となった中学生は、入学後の新しい課題や問題が多いことが考えられる。すなわち、中学校に入学時の環境変化を家族と共に乗り越えていこうとする共通意識の高さが学校適応感に影響するのではないかと考えられる。また、中学入学後の小学校を振り返っての調査項目において、小学校卒業の段階から中学校入学時という大きなイベントを通過してくるプロセスにおいて、家族間での絆の高まりが生じたと予測され。

**【検討項目5】小学校での家族機能と中学校生活への予期不安について**

小学校での家族機能に対する子どもの認知は、中学校生活に対する期待や不安に影響を与えないことが明らかとなった。すなわち、家族間の人間関係が良好であったとしても、学校での人間関係の状況から中学校への期待や不安には影響しないということである。これは小学生における家族の関係は、中学校での生活の期待と不安よりも、小学校での生活という目の前の場面に対する対応に追われているのではないかと考えられる。また、小学生での期待得点と中学校に対する不安得点の間に相関が見られたことは、中学校への期待と中学生生活に対する不安が質問紙で測定される場合は同一次元上にあらずことが出来ないということを示しているといえる。これまでの研究でも、期待と不安を単一次元化することは、小学生においても中学校においても一致しないことが示されている。すなわち、期待と不安について、中学校の授業が理解できないことへの不安が、一方

では新しい知識を学習することへの期待となったり、また新しい担任の教師がこれまでの教師の不満な部分を補ってくれる可能性を期待することなどが考えられるからである。一方、期待は他の側面での可能性として、失敗への予期不安も生ずることもあると考えられる。そのように、期待が不安を引き起こし、不安が期待を引き起こす可能性は常に存在するといえる。

**【検討項目6】中学生生活への期待と不安および学校での適応得点の性差について**

小学生については期待得点・不安得点・学校適応感得点において男子よりも女子の方が得点が高かった。中学生への期待得点と小学校時代の適応感得点および中学校についての適応感得点においても、女子の方が得点が高かった。南他(2011)で指摘されているように女子の方が中学校進学に関連した精神的な圧力を受けやすいということが見られた。人間関係の形成、情報の活用、将来設計のような将来に対する不安に関連する項目で、女子が男子よりも有意に高いと考えられる。

**【まとめ】**

以上述べてきたように、小学校での不安感や適応感の根拠となる自己意識の発達を考慮すると 1. 小学校についての適応感が高い場合、中学校についての適応感も高くなるということ、2. 中学校生活に対する期待や不安が低くても高くても中学校についての適応感是不変なこと、3. 家族機能の認知が良好である場合は中学校で適応感が高くなるという結果となった。これは自己意識の発達という点からみると中学生への入学後には環境の変化によって自己意識への圧力に対応するためには、友人関係だけでなく家族との関係が良好であることが必要とされることがいえるであろう。一方、小学校での家族機能に対する子どもの認知は、友人を中心とした自己意識の発達過程にある中学入学時には期待や不安に影響を与えないことが明らかとなった。また、小学生については期待得点・不安得点・学校適応感得点について、男子よりも女子の方が得点が高かったことは、女子の方が、自己意識の発達が早いためであろうことが指摘された。

以上のような考察から検討した結果、次の仮説に至った。それは、1. 不登校を個人の問題として考える立場と不登校を社会の問題として考える立場における教師と保護者の意識の差についての検討する必要があること。2. 地域、社会が、子どもが学校へ行くことを大切にしているかどうかと、それが社会全体の損失となるということ、3. 小学校から中学への進学の段階で不登校児が増加する

ことについて、生きることについてのはっきりとした意志を持った大人が生活環境の中に必要であり、回りにいる大人の自己意識が浅く自己決定力が少ないということが指摘された。これらの結果については今後の課題である。

なお、本研究は、松本大学研究紀要に投稿予定である。

【資料】 質問項目 中学生版

●1 あなたが小学生の頃にもっていた中学校のイメージについてお聞きします。文章を読んで、自分にあてはまると思うところに○をつけてください。

(例) 中学生になったら、たくさん勉強したいと思った。

1. 中学校には、やってみたい部活動(クラブ活動)があると思った。
2. 中学校に入って、新しい友達と、うまくやっていけるかどうか不安だった。
3. 中学校では、教科によって先生がかわり、たくさんの先生と出会えるのが楽しみだった。
4. 中学校に入ると、先輩たちからいじめられそうでこわかった。
5. 中学校に入ると、授業の中身がむずかしくなるので、ついていけそうにないと思った。
6. 中学校では、大きなテストが1年間に何回かあるのでいやだと思った。
7. 中学生になったら、いろいろな髪型をしてみたいと思った。
8. 中学生になったら、友達同士でいろいろなところや遠くに遊びに行こうと思った。
9. 中学校で先輩と知り合いになって、いろいろなことを教えてもらいたいと思った。
10. 中学校の部活動(クラブ活動)は、おそくまで練習があって大変だと思った。とてもそう思った・すこしそう思った・あまりそう思わなかった・まったくそう思わなかった

●2 あなたの家族の様子についてお聞きします。文章を読んで、自分にあてはまると思うところに○をつけてください。

(例) わたしの家族は、毎日いっしょに朝ごはんを食べる。

1. わたしは、問題が起こったときには、いつも家族をたよりにする。
2. わたしの家族は、いっしょに何かをするのが好きである。
3. わたしの家族では、話し合いをするとき、わたしの意見も聞いてもらえる。
4. わたしの家族は、お互いに仲良しだ。
5. 家族がそろると、なんとなくおもしろい気持ちになる。
6. わたしの家族は、あたたかくて明るい感じがする。
7. ちょっと失敗しただけでも、お父さんやお

母さんにきびしく叱られる。

8. わたしの家族では、きまりを守ることがとても大切にされている。

9. わたしの家族では、家のきまりを変えることがむずかしい。

10. 友達ちについての悩みなどを、家族のだれにも相談できない。

●3 あなたが小学生だった頃のことでお聞きします。文章を読んで、自分にあてはまると思うところに○をつけてください。

(例) 休み時間には、友達ちといっしょに遊んだ。

1. 学校に行くのは楽しかった。
2. 学校が休みの日は、たいくつだ。
3. 学校に行きたくないと思うことがあった。
4. こまったことがあったら、友達ち相談した。
5. 友達ちには、自分のひみつなど何でも話すことができた。
6. 国語や算数など、学校で受ける授業は楽しかった。
7. 自分は、いやなことなどがあると、くよくよ悩むほうだった。
8. 友達ちから自分は大切にされていた。
9. 授業中、先生の話をよく聞いていた。
10. 自分は、落ちこむことが多かった。

●4 あなたの現在のことでお聞きします。文章を読んで、自分にあてはまると思うところに○ (例) 学校が休みの日には、友達ちと遊ぶ。

1. 学校に来るのは楽しい。
2. 学校が休みの日は、たいくつだ。
3. 学校に行きたくないと思うことがある。
4. こまったことがあったら、友達ち相談する。
5. 友達ちには、自分のひみつなど何でも話すことができる。
6. 国語や数学など、学校で受ける授業は楽しい。
7. 自分は、いやなことなどがあると、くよくよ悩むほうだ。
8. 友達ちから自分は大切にされている。
9. 授業中、先生の話をよく聞いている。
10. 自分は、落ちこむことが多い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①後藤広輔, 川島一夫, コラージュ制作の気分変容効果—切り抜き材料の種類と制作者の表現活動への好悪の視点から— 2011年6月, 信州心理臨床紀要 第10号, 43-52, 査読無

②傘木香菜子, 川島一夫, 場面に応じた自己

の切り替えと不登校傾向の関連 2010年6月,  
信州心理臨床紀要 第9号, 13-22, 査読無

③宮崎健人, 川島一夫, 上村恵津子, 規範意識に及ぼす状況の依存性の影響について  
2010年6月, 信州心理臨床紀要 第9号,  
39-46, 査読無

〔学会発表〕(計1件)

①川島一夫, 中1ギャップの予防のために—  
発達心理学から考える 第1回しんしんゼミ  
ナール 信州大学公開講座 2010年7月24  
日, 信州大学教育学部

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川島 一夫 (KAWASHIMA KAZUO)  
信州大学・教育学部・教授  
研究者番号: **40135116**

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: